

# 「平成26年度 酪総研シンポジウム」 を開催

雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所 荒田 祥裕



雪印メグミルク(株)酪農総合研究所は1月28日、札幌市内で「平成26年度酪総研シンポジウム」を開催した。本シンポジウムは我が国の酪農畜産を取り巻く様々な課題に焦点を当て、主題に沿った講演および討議を通じ酪農産業発展に向けての指針や方向性を探ることを目的に毎年開催している。今回は「乳牛飼養管理の向上－日本型飼養管理の方向性」をテーマに、全国各地より約280名の酪農生産者、行政、試験研究機関、JA、酪農関係企業の方々が参集の下、盛大に開催された。

近年、貿易自由化の発展、飼料価格の高止まりや不安定な乳製品需給、更には頻発する天候異変等、我が国の酪農生産への影響が顕在化するなかで、国政レベルで酪農の成長産業化、生産力強化、自給飼料の生産拡大および経営安定に向けた支援対策が講じられている。特に低コスト生産による収益力向上に対しては安価な飼料を調達・活用するとともに、適切な飼養管理方法で乳牛を健康に飼うことが基本であり、その上で様々な制度・政策を有効に活用し、国民の食生活の向上に寄与していくことが重要と考える。

そこで今回は、農林水産省生産局畜産部畜産振興課長の小林博行氏、雪印種苗(株)北海道統括支店技術推進室長の松本啓一氏、酪農学園大学農食環境学群循環農学類ルミノロジー研究室准教授の泉賢一氏をお招きし、酪農施策および乳牛飼養管理技術に関わるご講演を頂いた。

## 【講演1】「我が国の酪農施策の展開方向について －飼養管理及び飼料生産を中心として－」



農林水産省 生産局 畜産部  
畜産振興課長 小林博行 氏

小林氏は近年の猛暑等の環境変化や繁殖性の低下等による経産牛1頭当たりの乳量の伸び悩みを指摘した上で、「これからは乳牛の生涯生産性に配慮しつつ、飼料効率の改善が期待できる泌乳持続性に着目した改良の推進が急務であり、供用期間の延長や性判別技術の活用による優良後継牛の効率的な生産が重要な視点となる。特に牛群検定は飼養管理技術の向上や経営改善に有益となるため大いに活用して頂きたい」と乳牛能力向上に対する積極的な取り組みが必要とした。

また輸入飼料価格が上昇傾向で推移し、経営コストへの負担増加が懸念されるなかで、「放牧を含む国産飼料の利活用促進が今後益々重要となってくる。特に自給飼料の拡大は生産コスト低減ばかりではなく、地域との融和、国土資源の活用と多面的機能の発揮、家畜排泄物の有効活用、更には食料自給率の向上にも結びつく。そのためにも草地生産性向上対策事業をはじめとする各種メニューを積極的に活用しながら推進して頂きたい」と自給飼料拡大を促すとともに、「特に来年度からはエコフィードや飼料米など新たな穀物素材の利活用の促進に力を入れる方針である」と国が目指す飼料生産の方向性を示した。

更に今後の土地活用とそれを担う組織のあり方にも触れ、「将来的には地域をまとめ、土地を集約して頂きたい。そのためにはコントラクターやTMRセンターが中核となり、担い手や技術者の育成と次世代への継承を担う組織になって頂くことが必要。私どもはこれらの組織の方々を今後の我が国酪農を支える重要な担い手として期待している」と述べた。

## 【講演2】「乳牛のモニタリングの活用事例」



雪印種苗(株)北海道統括支店  
技術推進室長 松本啓一 氏

松本氏は酪農場におけるトラブルシューティングを行うためのアイテムとして、ボディコンディションスコア、ロコモーションスコア、糞洗いの3つを基本とした乳牛のモニタリング手法について、「客観的に数字でチェックするスコアリングは、誰でもその牧場の経時的な変化を把握できる点が優れている。特に乳検データと照らし合わせて管理することで牧場の問題点により鮮明となり、疾病の兆候を早く見つけることができるため、適切な対処につながる」と解説した。

また、分離給与形態とTMR給与形態のボディコンディションスコアの集計データをもとに「特にTMR給与牛群のほうが過肥傾向にあり、ケトosis等の疾病リスクが高い。これに対しては移行期の管理方法や飼養環境を良くして乾物摂取量を高めることが重要であり、そのためにもモニタリングは効果的である」と取組みの重要性を強調した。

更に「牛の横臥時間が長くなると、乳房への血流量が増加し乾物摂取量が増加することで乳牛の生産性が高まる」としたなかで、「横臥時間が1時間増えることで一日当たりの乳量が1.7kg増加するデータもある。特に砂の牛床はクッション性が高く横臥率が高いことから乳量増加による収益向上が期待できる。また蹄への糞の付着が少ないことから、趾皮膚炎等の発症予防にも役立つ」と牛舎環境の改善と生産性向上が密接な関係にあることを説明した。

## 【講演3】「濃厚飼料削減への近道— 基礎から飼料給与への応用」



酪農学園大学 農食環境学群  
循環農学類 ルミノロジー研究室  
准教授 泉 賢一 氏

泉氏は「現代の酪農は所得の追及により、牧場の適正範囲を超えた乳牛頭数が飼養されるようになったため生産乳量は増加したが、逆に輸入飼料への依存、化成肥料の増加、糞尿処理量の増加などの弊害がみられる」と指摘したなかで、「これからの酪農は適正な頭数規模の下、輸入濃厚飼料を減らして副産物活用による

飼料の利用効率向上を目指す“乳牛を健康に飼いながら所得も減らさない”という形が理想的である」と今後の循環型酪農のあり方を提案した。その上で非粗飼料繊維源について「一般的にデンプン含量を低くして非粗飼料繊維源を多給すると物理性の不足によりルーメンマットが形成されず、デンプン源の代替としてはエネルギーが不足すると言われているが、組み合わせる粗飼料の種類によっては十分利用可能である。特に泌乳初期などエネルギー要求量の高い牛群に対してはルーメン内充満によるDMIの抑制を防ぐことができ、泌乳後期牛群はエネルギー濃度の低い非粗飼料繊維で要求量のバランスを取ることができるなど、ステージ別の給与設計次第では粗飼料以上の効果が発揮できる」と新たな飼料としての有用性を強調した。

また代替粗飼料として注目されている稲WCSと飼料米についても触れ、「粗飼料基盤が充実している北海道においては稲WCSよりも飼料米の普及に期待が持てる。特に飼料米は“国産濃厚飼料”という位置づけであるとともに、耕畜連携という視点からも非常に魅力的である。栄養価や分解率もトウモロコシと同等以上で加工形態も多様化している」と説明、更にルーメンマットの穀物取り込み機能を最大限に発揮できる飼料給与順序や、給与飼料の利用効率やタンパク質と炭水化物の分解速度の違いを考慮した飼料給与方式を紹介するとともに、「タンパク質飼料は最も高価な飼料原料であるため、窒素の利用効率を把握することが大切である」とMUNのモニタリングが重要と説明した。

